

専復専

―三十周年記念式典の日、記念講演の要旨―

唯信砂文意

極楽無為涅槃界

随縁雑善恐難生

故使如来選要法

教念弥陀専復専（法事讃下）

往生浄土

この御文は善導大師の法事讃下にある御文で、唯信抄文意に親鸞聖人が親切丁寧を極めて御解釈下さいました。涅槃界ということから計らずも、聖人の如来観というのも非常に明かにされてあります。今日はそれを頂かうというのではありませんが、この大意をうかがって新しい出発の指標にさせて頂きたいと思っております。

「極楽無為涅槃には、随縁の雑善は恐らくは生れ難からん……」

私どもは皆御浄土に往生させて頂くことであります。親鸞聖人が八十八歳の時乗倍房への御滑息に「御信心たじろかせたまはずしておのおの御往生候ふべきなり。」と仰せになり、又有阿弥陀仏への御返事にも「この身は今歳きはまりて候へば定めてさきだちて往生し候はんずれば、浄土にて必ず必ず待ちまいらせ候ふべし。」と仰せになっていられます。かうして今日は三十周年記念式典で多数の御同胞の御集を頂いていますが、皆やがては死ぬるのであります。先の式辞では浄土にある多くの御同胞に感謝致したことでありますが、やがてあの同胞たちのところへ往かせて頂くのであります。それを思いますと阿弥陀経の中の具会一處の文字が有難く思われます。と同時に聖人の「おのおの御往生候ふべきなり。浄土にて必ず必ず待ちまいらせ候ふべし。」の御言葉が身にしてみて頂けることであります。この世で一つになることを何故説かないかといわれる人がありますが、この世で一つであるようでも、いづれ別々になるようではこの世でも一つではない。この世では皆別れ別れになる。合うたはどの人間に皆別れねばならぬ。然し別れた人も皆お念仏の信心一つで必ずお浄土で会えるということ、今は別れても末は必ず一つになれる。必ず一つ世界に生きさせて頂くということが、今日も亦一つの世界に生きさせて頂くということでもあります。今は一緒に暮しても、後には別れ別れになってしまふのであるということは、今日も本当は一つではないということでありましょう。でありますから皆同一に極楽無為涅槃界、お浄土に往生させて頂かねばなりません。

恐難生

ところが「極楽無為涅槃界には、随縁の雑善は恐らくは生れ難からん。」と仰せられます。この御文を唯信抄文意には「随縁は衆生のおの縁にしたがひてもろもろの善を修するを極楽に廻向するなり。即ち八万四千の法門なり。これはみな自力の善根なるが故に実報土には生れずときらはるる故に恐難生といへり。」と御解釈されま

した。「恐らくは生れ難からん。」とはいわゆる聖人の言は切迫せずで、やわらげて仰せられたので、八万四千の善、随縁の雑善、縁次第で生れた思いつきの善根では極楽無為涅槃界には絶対に生れることは出来ないのであります。有限なるものをどれだけ積み重ねても、無限なるもの絶対なるものには手はとどかない。それを相対有限なるものの作り出す八万四千の自力の善根が役に立つように思うのが凡夫であります。それが自力であります。

そこで「故に如来要法を選んで教えて弥陀を念ぜしめ専らにして復専らならしめたもう。」と説かれるのであります。この文の如来とは釈迦如来、要法とは、法とは名号のこと。「故使如来選要法」というは釈迦如来よろづの善の中より名号をえらびとりて五濁悪時悪世界悪衆生邪見無信の者に与えたまへるなり（唯信抄文意）、つまり釈迦は名号を説き選んで五濁の衆生に与えたものであります。

「教念弥陀専復専」（教えて弥陀を念ぜしめ専らにして復専らならしむ）これを聖人釈して「即ち選択本願の名号を一向専修なれと教えたもうみことなり」といわれます。御念仏一つを教えず、めて下さるのであります。

「専復専」というのははじめの専は一行を修すべしとなり。復はまたという、かさぬという、然ればまた専というは一心なれとなり。一行一心をもはらなれとなり。専は一つという語なり。もはらというは二心なれとなり。ともかくもうつる心なきを専というなり。この一行一心なる人を弥陀攝取してすてたまはざれば阿弥陀と名づけたてまつると光明寺の和尚はのたまへり」

と釈せられて、次にこの一心は横超他力の大信心、念仏往生の本願の三信であることと説かれてあります。今日誠に三十周年の記念として特に頂戴したいのは、この事復専ということであります。一行一心専復専、いよく我等の往くべき道は明かであります。専らにして復専らなれ。純粹により純粹に、いよいよ純粹に御念仏の道を歩ませて頂くのであります。

専復専

はじめの専は名号の一行、後の専は他力信心の一心、であるから一行一心といつても一が二つあるのではない。初の専があつて、それがとゞいて後の一心がある。一行を受取つた心即ち一心、一が二つあるのではない。他力の一心のみがある。この一心は一行を受取つた心、名号の大行を受取つた大信心、一行一心専復専、御信心一つというも、御念仏一つというも同じこと、この一心のみが如来より廻向されたものであるから「この信樂は衆生をして無上大涅槃にいたらしめたもう心なり、この信心即ち大慈大悲の心なり、この信心即ち仏性なり。」と聖人は讃えておいでになります。

我等はこれからいよいよみ教の如く歩ませて頂かねばなりません。一人でもより純粹に歩む人即ち量より質、質こそ誠に大事であります。誤つて大衆を一度に網に入れるようなことをしてはならない。より鋭角により鋭角に、決して世間一般になされるように、何とかして一時に大衆の集合することを希望して、上手にあの手この手を打つが如きことをしてはならない。それは宗教ではなくして興行であり、下手まづいはか

らいであり、人の征服である。あくまで私一人が聞法精進させて頂くこと。私一人が精進することが若し御冥見に叶はば、必ず一人の友を得ることが出来ることは、皆様がすでに体得され、あるいは眼前に見ていることでもあります。一人が、私一人が、いよいよ聞法精進させて頂くこと、この世に出して頂いたことは、正法を聞いて出世の一大事を満足させて頂くにあると口に言っているのではなくて、一生をかけ生活をかけて専復専と生きさせて頂くことでもあります。

この一は如来廻向の一であります。如来本願の顕現したる一心であります。有限なるものから出たものでなくて、絶対無限なる如来本願そのままの一心であるが故に、極楽無為涅槃界より廻向させられたる一心なるが故に、よく極楽無為涅槃界に至るのであります。

この一は外に向って他を統一する一ではない。それは全体主義的な征服である。そうではなくて内を、八万四千の煩惱のみなる内を統一する一である。外なる八万四千の一切が内に八万四千の煩惱となる。我等は今歴史的な苦悩を苦悩している。この祖国の一切が内に歴史的な苦悩となつて、苦悩せしめられている。その一切を内に絶対統一する一である。この内に開く一心こそ八万四千の生死煩惱を内に統一して、水火二河の間に白道となり、一切の悪を転成して徳とし福とする金剛の信心であります。我等はあるがままの人生があるがままに受取りつつ、しかも内にこの廻向の信力によつて御念仏一つを生きさせて頂く、苦悩が深ければ深いほど、御念仏一つ、波が高ければ高いほど、御念仏一つに生きさせて頂くこと、専復専のみ教を現実の中に頂いて如実に生きさせて頂きたいと思ひます。(二三、四、一)